

経済情勢

概観

海外

◇国際資金移動の活発化

1958年末の西欧諸国の交換性回復を契機として、世界各国の通貨はいっそう安定傾向を強め、その後の貿易・為替の自由化の進展に応じて国際間の短期資金移動もおおむね金利裁定資金を中心に活発に行なわれた。とくに本年6月以降の米国の二度にわたる公定歩合引下げならびに西ドイツ、英国の公定歩合引上げにより欧米間の金利差が拡大したため、短期資金の国際移動はいっそう活発化するに至った。すなわち最近の3ヵ月物財務省証券レートが米国では2.5%前後であるのに対し、英国では5.5%前後と約3%の開きが生じ、先物カバーを行なってもなお1%近く英国が割高であるため金利裁定目的の短期資金が多量に米国から欧州に流れ、また欧州大陸、中南米などのいわゆるユーロ・ドルがロンドンに集中する現象を生んだ。

しかるに本年8月コンゴ問題の発生、ベルリンをめぐる東西の対立激化や西ドイツマルク切上げの根強いルーマーなどに基づくいわゆる逃避資金や思惑資金が前記の金利裁定資金移動に加わり、国際短期資金の移動はとみに大規模かつ不安定化し、各国の金融政策の実施に種々の問題を投げかけている。

すでにブーム状態にある英国、西ドイツ、スイスなどに対する大量の海外短資の流入は当該国の流動性を増大せしめ、金融引締め政策の効果を減殺する一方、資本の逃避に悩む南ア連邦、ベルギーなどは国内均衡の犠牲において高金利政策を余儀なくされている。とくに逃避ないし思惑資金は

その不安定性のゆえに国際収支の動揺を激しくする恐れがある。

かかる情勢に対処するため、西ドイツは6月非居住者預金に対する付利禁止など短資流入の抑制措置をとったが、これに次いで8月スイスも短資流入を抑制するため中央銀行と市中銀行との間に西ドイツとほぼ類似の内容の紳士協定を締結した。これらの措置により完全に短資流入を阻止しようものとは思われないが、少なくとも金利裁定資金の流入をかなり鈍化させるに役立っているものと思われる。このため、米国よりの金利裁定資金およびコンゴ、南ア連邦、ベルギーなどよりの逃避資金は主として高利かつ自由なロンドン市場に集中的に流入する結果を招いている。英国は元来一般に金保有傾向が強く、この流入資金の一部は金に換えられ、米国より金流出の急増ならびにロンドン金市場における金価格の高騰（9月12日、35.25ドル）を招いた。

とくに米国の貿易収支が年初来20億ドルの黒字を記録している反面、英国のそれは6、7、8月の3ヵ月で約8億ドルの赤字を示しているにもかかわらず、米国の金保有高が年初来4.6億ドルを減じて9月初めには190億ドルの大台を割ったのに対し、英国の金・外貨準備は年初来約11億ドルの増加を示している。これは主として前記のごとき短期資金の移動によるものであって、その限りにおいては国際均衡上望ましい動きであり、またある程度は短期資金それ自体の均衡作用が働くことも考えられるが、このような動きがいっそう激化した場合はその反動もそれだけ大きくなるわけで、短期資金の移動が国際均衡破壊的に作用する恐れもあり、今後の動向が注目される。

国内

◇経常国際収支戻 7、8月と黒字続く

7月の国際収支は、経常収支戻で久方ぶりに1百万ドルの黒字を示したが、8月も若干の黒字となった。短期外資の流入が引続き好調なため、8月の外貨準備は64百万ドルの大幅増加をみた。輸入は高水準ながら落ち着いているのに対して、輸出はこのところ持ち直し傾向にある。とくに鉄鋼は戦後最高を示し、また停滞気味であった米国向け輸出がやや回復をみている。輸入水準は決して低くないが、季節の出超期に当っており、当面国際収支はおおむね平穏な推移が予想される。

7月の鉱工業生産指数（確定分）は、なお2%とかなりの増勢を示した。設備投資の盛行や自動車の好調を反映して、機械と関連部門（ゴム、鉄鋼など）の増勢が強く、これが生産を押し上げる主軸となっている。しかしその他では、引続き一進一退な動きがみられ、総じて落ち着き模様となっている。出荷も、投資財が引続き好調のほか7月には夏物電気器具も伸びた。このため生産者製品在庫は今年にはじめて前月比-0.2%の減少をみせ、在庫率も年初来の最低となった。これまで市況が軟調であった商品でも、在庫の増勢が鈍ってきている。これは輸出の持ち直しなどもあるが、同時になしくずし生産調整の効果がようやく現われてきたものといえる。

このような動きを背景として、商況にはこのところやや底堅い動きがみられる。本行卸売物価指数（食料品を除く）も8月には久しぶりに前月比0.2%の上昇となった（9月上旬も0.4%の続騰）。鉄鋼、非鉄が底堅いほか、建築材料の上昇と原糸を中心とした繊維市況の反発が目立つ。繊維市況の反発には仕手筋の売り込み過ぎの反動が作用しており、建築材料の上昇は季節的なものである。

しかし反面では、鉄鋼、繊維などいずれもかなりの弱材料をかかえており、目先き物価は上伸力に乏しいことというまでもない。

◇景況まずまず順調

8月の銀行券は184億円の還収超と前年同月（17億円還収超）を上回る還流ぶりであった。平均発行高の前年同月比でみても+16.0%と前月（+17.8%）を下回った。これは台風の影響で行楽資金需要がやや低調だったことなどによるもので、銀行券の基調が変わってきたとはみれない。なお当月は財政資金の引揚げが大きく、金融市場の引締まりが強くなる見込みとなったため、8月12日政府保証債の買入措置（490億円、額面501億円）が実施された。これによって、金融市場は引締まりのうちにも平穏に推移した。

一方、全国銀行貸出は引続き大メーカー運転資金、設備資金を中心に月中1,128億円の大幅増加を示した（前年実績773億円）。とくに設備資金貸出は、設備代金支払が集中しているためもあり、このところ一段と高まっている。なお、資金需要は引続き強いが公定歩合引下げに伴って、標準金利適用先については順調に金利引下げが進んでいるようである。一方預金通貨動向からみると、企業の手元は、依然引締まり気味に推移している。

以上のように、生産は引続き増勢を示しているが、当面の景況をさきえている中心は機械関係であり、その他の部門では生産在庫などなしくずし調整が進み、総じて落ち着き模様が続いている。このところ製品在庫負担がいくぶん軽くなり、市況にやや底堅さが加わっているのは、以上の情勢を背景とするものである。銀行貸出は依然増勢を続けているが、当面景気はまずまず順調な足りをたどっているものとみてよい。